

【資 料】

詩二十一篇

矢 口 以 文

『詩二十一篇』

帰り道

小学校の帰り道にいくつか小さな店があった
肉屋 八百屋 米屋 果物屋 なんでも屋
学校の門から一番近い店は
魚屋だった 今日もその小父さんが

腰に大きな黒ゴムの前掛けをして
大きな魚をさばくの眺めていた
氷の詰まった大きな冷蔵庫から
大きなカツオを一本 取りだして

まな板に載せ 首のあたりに
ぐさり 魚包丁を突き刺し 頭から
胴体を切り離し さらにそれを
二つに裂き 皮を切り離し 細い包丁で

刺身の列を手早く作った
出来あがるとそれを薄い木の皮に包んで
配達用の木箱に入れた すると奥さんが
奥から出てきて それを自転車で届けに行った

帰ろうとすると「おーい ちょっと待って
アラが出たからお前の母さんに持ってゆけよ」と

折れた骨や頭を薄皮に包んで
私に持たせ 小父さんはほほ笑んだ

試し切り

その侍は手に入れたばかりの名刀を
どうしても試したかった
その夜 木の陰に身を隠し
小道をやって来る誰かを待っていた

やがて ナムアマミダブツを唱えながら
提灯下げた老人が
腰を曲げて のろのろやって来た
目の前まで来た時

侍は一步踏み出して 大上段から
刀を振り下ろして 老人を
頭から切り裂いたのだが
その老人はそのまま 二、三步

歩いて ナムアマミダまで
続けた時 体が

矢口以文

真二つに分かれて
血が噴き出し どうつと倒れた――

国民学校五年生だった僕らは 先生が
とくとくと語る日本刀の切れ味に感動し
息をのんで 静まり返った
太平洋戦争で日本軍が勝っていた頃だ

その時の僕らには 殺された老人のことや
その家族のことに少しでも
思いを馳せる者はひとりもいなかった
ささいな話題にさえもならなかった

国会議員達の靖国神社参拝

――英霊にされて拜まれている人たちが言う――

今年も いつものように大臣たちをも含めた
議員たちのグループがまたぞろやってきて
英霊にされた私たちを拜むのだけれども
どんな気持ちでそうするのか分からない

私たちの多くは農家の出身で
戦争に駆り出されて戦死し 今この神社に
このように捕われて 祀られているのだが
あなた方の祈りの趣旨が分からない

今の繁栄は太平洋戦争に負けた結果だ
ということだ 負けたけれども戦って
死んだ私たちに 有難うと言いに来たのか

それとも この国が再び

もっと大きな戦争をして もっと大きく負けて
もっと大きな繁栄がもたらされるようにしたいから
応援よろしく頼む
ということだ 祈みにきたのか

もしそうなら 祈られても もう
聞く耳を持たない 何も言わずに
立ち去ってほしい もう来ないでほしい
私たちを そっとしておいてほしい

神々

子供の頃 私の拜んだ神はどんな神だったのか
朝早く起きて 村はずれの ひとけのない神社に行き
手を合わせて 日本の国が
勝ちますようにと祈った

敵の鬼畜米英を打ち負かし
日本軍を守ってくださいとお願いした
学校でもみんな祈って そうお願いした
国民はみんなそれぞれの神社で祈って そうお願いした

靖国神社でも明治神宮でも祈って そうお願いした
神だった天皇にも祈って そうお願いした
その天皇も 先祖の天照大御神や
神武天皇にも祈って そうお願いしたようだ

だけど 初めは調子が良かったが
いったん悪くなると いくら祈っても戦況は
良くならなかった 祈ればますます悪くなり
とうとう東京が米軍機による大攻撃にさらされた
沖繩では集団自決も含めて十数万の県民が殺され
広島と長崎では原爆が投下され その瞬間数十万が
焼け死んで 日本はやつと無条件降伏を受け入れた
戦争を始めた人たちは 天皇を除いて戦犯になった
戦争中 皆で祈っていた神々は一体
どんな神々だったのか なぜ一億の国民の祈りを
聞きとどけてくれなかったのか それとも
そんな神々は初めからこの国には居なかったのか

迫撃砲

高校時代の夏休み 年齢を偽って
わが町に駐留していた米軍の基地で
アルバイトをしたが ある時
迫撃砲の掃除を命じられた
薄緑色で中背の迫撃砲が五十ほど整列していた
バケツ一杯に水を汲み 雑巾で
砲たちの頭から足の先まで
丹念に洗って拭き清めた
まるでおとなしい口バたちだった
胴体や胎を優しくさすると
気持ち良さそうな表情を浮かべて
体を摺り寄せてきた

まもなく朝鮮戦争が始まり
わが町に駐留していた米軍も戦場に駆り出された
ある時 北朝鮮軍を攻撃する米軍の映像を
テレビニュースで見ているら 僕が洗ったあの
迫撃砲の群れが勢ぞろいし
向こうの敵陣に向かって
口を痙攣させながら 狂ったように
焰の固まりを吐き出していた
それらは次から次へ一直線に
敵陣へ飛びこんで爆発し
深紅の土煙を巻き上げ 敵兵たちを
人形のように吹き飛ばした

壊れる瞬間がある

年の終わりに 神社や寺に
お参りに行く善男善女の姿が
今年もテレビで映し出された
神社の前で手を合わせる人々の姿は
祈りそのものだった その静かな姿は
まるで人間が神に
或いは神が人間になったかのような
除夜の鐘が響き続けた
観音像の前に立って
祈りをささげている人たちの顔は
恵みと平安で満ちていた
観音との合一が

永遠に続くかのような
その間中 僧侶たちの低い
読経のさざ波が響き渡っていた

しかしこのような静謐が突然
壊れる瞬間がある 善男善女の
仏や神になった顔が突然
悪鬼の形相に変わる瞬間がある
国家が大きな声で
「隣の国が攻めてくる！」と叫ぶ時だ

この国がパールハーバーを攻撃した時も
憎悪と歓呼の叫びが一斉に
寺や神社から舞い上がった
「アメリカとイギリスは鬼畜生だ！」
この国にたてつく者はみんな
地獄に落としてしまえ！あいつらは
けだものだ！人間でない！」そして
小学生だった私も一緒に顔を歪めて叫んでいた

子孫よ

いくら政府に命じられても
腰を上げるな 戦うな
みんなが心を一つにして戦わなければ
敵がこの国に押し寄せてきて
皆殺しにするだろうと
彼らは脅し文句を振りまくが 信じるな

岩のように坐して動くな

子孫よ 君たちの本当の敵は
国民を戦争に駆り立てる政府と
その取り巻きの怪物たちだ

死体

医学生たちが数人
ひそひそ話し合いながら入ってきた すると
ホルマリン液に浮かんでいた死体のひとつが
すうっと 彼らに近づいて

「話をやめてください！ 私たちは真剣なんです」
と叫んだ 学生たちの体が一瞬こわばった
そのあと その死体はもとの場所に
すうっと 戻って行った

首が切られた

首を切られた鶏が
血を噴出しながら
数メートル走って バサッと倒れた
ギロチンで

首をはねられた男の記録を思い浮かべた
一瞬血が噴きあがったが

首を失ったまま男は立ち上がった
数歩ふらふら歩き
その後 どうと倒れた

見物人たちは大喜びで手をたたき
口笛吹いて
大笑いした

詩人もどき

「お前は詩人ではない 偽者だ

詩のようなものに

詩のような衣装を着せているだけだ」

――折に触れ こんな声が響いてくる

「詩は高尚なものだ

洗練された表現で創られる芸術作品だ

しかしお前のものは違う」

――折りに触れ こんな声が響いてくる

「詩は時代を先取りする預言だ

接した人たちを高い次元に導き

心に天の声を響かせるもの しかし

お前のものは違う 全く違う」

「詩は沈黙でもある

読むものを沈黙に引き込むもの そのあとで
その底から光の手で引き上げるもの しかし
お前のものは違う 全く違う」

「お前の反戦詩は 戦争するものたちの中に
小波ひとつさえ立てはしないし
平和を作るものたちにも全く響かない

お前の書くものは詩ではない 全く違う」

「お前の作品は平凡な景色そのものだ

そこで出会う者たちは安物売りだ お前は全く
つまらない法螺吹きだ」

――折りに触れ こんな声が響いてくる 響き渡る

やっと出てきた！

――イスラエル軍がまたガザを攻撃した――

「出てこない 出てこない 預言者の伝統の国に

どうして出てこないのか」といぶかしく思っていたら

「武器を持っている いなに関わらず パレスチナ人は

みんな殺せと命令された！」との声はやっと出てきた

ガザを攻撃し 住民を虐殺し その国土を

瓦礫にしたイスラエル兵たちの中からも

退役した軍人たちの中からも 数人が出てきて 口を震わせ

自分たちの国の告発を始めた 二〇〇八年のことだ

「老人も女も子供もみんな

野良犬のように殺せと命令された！」――

イスラエル政府と軍が慌てて圧力をかけ
口を封じようとしたが 彼らはかまわず続けた

「パレスチナ人を海に追い込んで 一人残らず
滅ぼせ!というラビのピラが全部隊に配られた!」

「そんなことはあるはずがない!」と
当局が躍起になって押さえ込もうとするが

やったことの重さに やらされたことの重さに
かろうじて耐えていた彼らは 告発を止めない
嗚咽交じりの低い叫びが 彼らの口から
飛び出し続け 告発者は数百人にも膨らんできた――

一神教の人たちも 多神教の人たちも

神を信じない人たちも そして私も 目を凝らして
聖書の民の政府がどのようにしてこの種の告発を
封じめるのか 或いは 封じないのかを 見つめている

サラに

サラよ あなたはアウシュヴィッツに捕らわれていた時の
子供時代の経験をいつか私に話してくれた

立ち上がれなくなった母が ガス室に連れて行かれたことを
よろよろし始めた姉が ガス室に連れて行かれたことを
煙突からの絶えず出る煙を泣きながら見ていたことを話してくれた

サラよ あなたの目がかすみ 立つのも困難になり
自分の処刑の番が近いと思いはじめた頃に やっとソ連軍がやってきて
アウシュヴィッツから解放してくれたことを

その時の喜びを 体を震わせながら話してくれた
涙がいつまでも止まらなかった

サラよ そのあなたがイスラエル軍のガザ攻撃をどう思っているのか
殺されたわが子を抱いて パレスチナの女性が

「私はハマスでない! どうして
私たちを攻撃するのか!」と

泣き叫んでいたのを見て どう思っているのか

アメリカ製の最新鋭兵器で

陸からも 空からも 海からも

無差別に攻撃を繰り返すのを見て どう思っているのか

ガザが破壊され 炎上するのを見て どう思っているのか

サラよ あなたの声が聞こえてこない

目を怒らせて撃ちまくる

自分たちの国の若者たちの行為を見て

心を躍らせて 褒め称えているのかどうか

それとも 泣きながら「いけないわ! いけないわ!」と

叫んでいるのかどうか サラよ 私たちには全く伝わってこない

一枚の写真

ホーチミン市の戦争証跡博物館に足を踏み入れた瞬間

衝撃の嵐に圧倒されたが やがて

石川文洋カメラマンの撮影した一枚の写真に

吸いつけられた 若いベトナム兵の千切れた頭を

右手にぶら下げている米兵の写真だ 1996年のことだ

そのベトナム兵の千切れた下半身は地べたに散らばっていた
米兵は左手に銃をしっかりと握っていた

その死体は彼が草むらの中に見つけたのかもしれない
または彼自身が撃ち殺したのかもしれない
彼の横顔からかすかに見える口元には笑いが浮かんでいた

獲物を見事に射止めた猟師の笑いのようだったが
ぶら下げた上半身はその後どうしたのだろうか

そのまま道端の草むらに捨てたのだろうか
下半身も同じように草むらの中に押しやって
同僚の兵たちが歩きやすいように道を整えたのだろうか

2012年の夏 石川カメラマンの講演を

北星学園大学で聞いたが ベトナムを攻撃した米軍機は皆
沖繩から飛び立ったということだ

それに 彼の知り合った米兵たちはみんな
親切で良い人たちだった とも教えてくれた

講演のあとで 展示されていた彼の作品を再び見たのだが
米兵は相変わらず口元にうつつら笑いを浮かべ 右手には

ベトナム兵の頭を逆さまにぶら下げている
いつまでぶら下げているのだろうか そして
この兵もまた 親切で良い人だったに違いない

いつ なぜ 悪が入って来たのか

— 猿山から聞こえてくる声 —

イブとアダムの禁断の木の実を食べる以前には
人間の心は汚れない真っ白な布だったのか

もしそうなら いつ なぜ 悪が
彼らの中に入って来たのか

食べても死なないから 取って食べてごらんと
蛇にそのかされて知恵の実を食べたが 人はその
そそのかしに負けるかもしれないように
もともと作られていたのではなかったか

ともあれ 人の中にいつからか善だけでなく悪もあり
ある時には善が強くなり またある時には悪が強くなり
この二つが相争ってきたようだが それは
その実を食わぬ原罪のない私たち猿には分からぬことだ

その人間たちが知恵の実を食べて獲得した知識で
自分を守るためと言いつ張り 競って兵器を作り出し
今では原爆と それを遙かにしのぐ核兵器を
それぞれの物置小屋に山のようにため込んでいる

もう直ぐ滅びるかもしれないこの哀れな動物たちの
最後を見ようと私たちはここに集まって
金網のこちら側の猿山に座り 毛繕いしながら
彼らの滅び去るのを 今か今かと待ちわびている

ある言い伝えによると

その人は三日三晩黄泉にいて
そこをくまなく歩いた
よろよろしながら
訪ねたい人をみんな訪ね

訪れたい所をみんな訪れ
その後で

もう一度この世に戻ってきた

その人は今どこにいるのだろうか

野原に一人ひざまずいているかもしれない

人々の中を歩いているかもしれない

何気なく話し合っているかもしれない

私はその人と会ってみたい

ひよっとしたら 知らずに何度も

その人と話を交わしているかもしれない

ある福島的女性

「こんなことになるのが

初めから分かっていたら 賛成するんじゃないか

欲に目がくらんで

とんでもないことをしてしまった！」

原発事故のすぐあと

避難を強制させられた女性の一ひたりが

避難用のバスに乗り込む時に

テレビカメラに向かって怒りを爆発させた

バスは女性たちを中に閉じ込めると

苦しむ原発のうずくまる浜通りを

よるよる迂回してから 見事に整備された道路に出て

どこにもない避難所に向かってまっしぐら走っていった

福島の子供たち

汚染を逃れて 福島の子どもたちが

今夏も北海道にやってきた

小鳥たちの囀る森の空き地で

日差しを浴びて のびのび遊び回っていた

そこに突然 通り雨がやってきた

空がにわかになんか暗くなり 雨が滝になった

少し離れた屋根の下で見守っていた母親たちが

慌てて「はやくこっちにおいで！」と叫んだが

子どもたちは振り向きもせずに

顔を天に向け 水晶の雨滴に口を開いて

「雨だ！雨だ！」と叫んで飛び回り

身体がびしょ濡れになった

おろおろしている母親たちの耳に

「この雨はまだ汚染されていないから

大丈夫だと思えますよ。それに今は

夏の盛りですから」と囁くと

母親たちの顔がやっと和らいだ

雨は間もなく通り過ぎ 太陽がまた

頭上に姿を現し 陽の光をさんさんと注ぎ始めた

周りの木々から小鳥たちのさえずりが飛んできた

父の育った家の跡で

石巻と松島の間の矢本という町の
海に面した大曲という集落に父の実家があった
津波に襲われる前は町営バスの終点で
「古川さん宅前」と呼ばれていた

父の家があったところにやってきて

ここが門だ そのすぐ隣に井戸があり

その横にナツメの木とイチジクがあったと
独り言を言いながら 思い出していたら

通りがかった老いた女性が話しかけてきた

「古川さんの関係ですか？」

「はい」と言うのと「私はこの隣に住んでいたものです」

「ああ 菅原さん？ ひよっとしたら 澄子さん？」

「ええ ああ 一緒に子供の頃遊びましたね
なつかしいわ。しばらくだねーす。

元氣そうですね。私は心配でね 実家を見るために
むこうからやってきたんです。がっかりしていたところなの

まんずたいへんなもんだねーす

家も家族もみんな流されてすまっつてー

あんだのもおんなずだねーすー」

いつの間にか方言になった彼女の話を聞いているうちに
ふっと この人はずっと前に亡くなっていたのではないかと
気がついた 「あんれ あんだはずっと前に亡くなっつて
聞いたんだげつとも そうでねがったんだね」と言った
すると 彼女はすーっと消えて 見えなくなつた

桃子おばさんの話

「宮城県の東松島市矢本は2004年と2005年に大地震に襲わ
れ、ある寺の壊れた墓穴から骸骨が数体出てきた」

まんず 魂消だのなんのつて あん時

家がブランコみだいに揺れだのつしや

神棚だの 仏壇だのがら 物がみんな

がらがら がだがだ 落つこつたのつしや

もうだめだ 家がつぶれると思つて

玄関から跳び出すて むこうの墓場の方を眺めたら

墓石が揺れだり 倒れだりすてえだのつしや

そすて もつと魂消げだごどに

そのすぐ横のほら あの斜面に 大ちな穴が開えで

その中で骸骨達が おろおろすてえだのつしや

私は腰を抜がすて 眺めてえだのつしや

歯ががつがつなつて 止まらねがつたのつしや

斜面が崩れで 隠れでえだ横穴のお墓が出でちたのつしや

中さ寝がされてえだ骸骨達が 目を覚ますたのつしや

千数百年も前から そこに寝がされてえだんだべなーす

お墓の中には 刀だの数珠だのが随分 あつたんだつてさ

このあたりの豪族だつたつて言うんだげつとも

もどもども ヤマトのほうがらやつてちて

俺達の先祖を支配すてえだんだつてさ

その骸骨だづはみんな びっくりすたんだべなあす

何しえ千数百年も前から 眠りこげでえだんだがらねえす

横穴をふさいでえだ岩の扉が 突然ぶつこわれで

命いのちからがら 着ちかるものも着ちかねえで飛びそうとすて
お天道てんどう様の光ひかりが 槍やりみだえに飛び込んでちたんだがらねえす

外ほかば覗のぞいてみで たまげだんだべや

世よの中なかがすつかり変かはってえだんだがらねえす

田いんぼや畑はたけに 道路みちが何本も這はってえで

そのうえで自動車じどうしゃが びよんびよん

いなごみだいに 跳はびはねでえだんだがらねえす

骸骨はつねだづが腰こしこば抜はがすて へなへな座まり込んだり

立たづ上かみがったり おろおろすたりすてえだのも

分わかんねぐねえなあ

やと地震ちきんが収こまったがら もう一度いっど

寝床ねどさ帰かって寝ねようとすたんだべなあ んだげど

近所ちかところがらの通報つうほうで あわてで飛とんでちた役場やくばの人ひとだづに

役場やくばさ連れて行いがれたのっしや

今いまでは倒たれた墓石はかいしも斜面せつめんの横穴よこあなも修繕しゆせんされたげつとも

骸骨はつねだづは 博物館はくぶくわんのガラスケースがらすケースの中なかさ寝ねがされで

見物人けんぶつじんだづの目めにさらされで 気きの毒どくに

もうぐつすりは 眠ねれねんじゃねえべがねえす

ある兵卒の告白

— マタイによる福音書 27章 27 — 31

十字架じゆうじゆうの下したで番ばんを命いのちじられた私わたしたちが

イエスの着きていたものを剥はぎ取とって切り裂きりき

賭かけで取り合あいをした そして

見上げもしないで 時折

十字架じゆうじゆうにつり下がさがっていたこの重罪人じゆうざいじんに

「おいおめえ おめえは本ほん当とうに神かみの子こかい？

もしそうなら 降りてこい！

そしたら俺おれたちは おめえを信しんじるぞ！」と

叫こんで みんなでゲラゲラ笑わらった

しかしイエスは降りてこなかった

イエスの処刑じょけいのあとでも 私はローマの兵士へいしとして

変わらぬ生き方を續つけていたが いつか老おいいて

遂ついにこの世よでの生命せいめいが終はり

死しの国くにに入り しばらくそこで永遠えいゑんのように

時間じかんを過すごしていたが とうとう呼よび出でされ

審判しんぱんを迎むかえることになったが 今いまその審判者しんぱんしやを見て

死ぬほど驚おどいた それは私わたしたちがあの時とき あざけたあの

処刑じょけいされたイエスではないか—

なんと申し開あきをしたらよいのか 私は

ただおののいて 自みづか分の順番じゆんぱんを待まちっている

羊飼いのイエス様

— ローマのカタコンベに描かかれている羊飼いの図ずを見て—

私の老おいいが完全かんぜんに熟じやくして

あなたの完全かんぜんに支配しはいする御国みくにに入る時ときにも

羊飼いのイエス様やぎかひのイエスさまが

共にいてくださいますように

永遠に目を閉ざすその瞬間に

私の生涯を導いて下さった

羊飼いのイエス様の顔が

私の上で微笑んでおられますように

私は今もまだ生かされていて

深夜に一度か二度 目を覚ましますが

永遠の眠りについている時に

そのようなことがあったとしても

羊飼いのイエス様の顔が

私の上で微笑んでおりますように

その顔を見て 直ぐにまた

永遠の眠りに帰ることが出来ますように

そして すべての時の終わりがやって来て

眠っていたものたちがみんな起こされて

裁きの座に行かなくてはいけなくなつたとしても

羊飼いのイエス様が共にいてくださいますように

